



北海道 Historical Museum of Hokkaido 開拓記念館 だより

2007年6月号
Vol.37 No.1

● 絵はがき「東北海道の要地 厚岸（収蔵番号144158）」

昭和初期に発行されたモノクロの絵はがき集。当館に残っているものだと7枚組み。「海の公園 厚岸湾口の大黒島」「牡蠣礁と塩性植物群落 厚岸湖の天然記念物」「花と旧跡に誇る 厚岸の国泰寺」など、海と湖のゆたかな風光を強調するものが目立つ。

「獲れる鯨 厚岸捕鯨事業場」の1枚は、クジラが引き揚げられた様子を写す。四角張った大きな頭の形はマッコウクジラ。写っている人と比べるとその巨大さがよく分かる。右上と左下の小さなコマは、大きな包丁を振るっての解体風景。そんな様子を見に、大勢の人が見物に集まってきている。

1913（大正2）年頃の新聞には、厚岸に解剖所を建設しようとする捕鯨会社と、クジラの血や油が海を汚して漁業に影響を与えることを心配する漁民の対立が報じられているが、ここでは解剖所は一つの見どころとして紹介されているようだ。

（学芸第三課学芸員 山田 伸一／歴史）



開拓記念館館長に就任して

北海道開拓記念館館長

丹保 憲仁

(北海道大学名誉教授 工学博士)

この5月から野幌の丘の上の開拓記念館の館長をお引き受けすることになりました。天塩川流域で幼時を過ごし、戦中・戦後の札幌で育ち、北海道大学で学生時代からちょうど半世紀のあいだ勉強をし、水の環境工学を中心に教育研究に携わり、工学部長・総長を勤めて退官しました生粋の道産子です。その後放送大学の学長として6年間東京で様々な活動に関わり、江戸から古里の蝦夷が島をじっと眺めて、愛してやまないこの島に骨を埋めるべく帰って参りました。

ふるくからアイヌの人々が独自の文化を育んできて、本州や樺太・沿海州などとの様々な関係を経てアイヌ文化は成熟しますが、徳川幕藩体制を経て明治の近代化が島の文明の圧倒的な転換点となり、アイヌモシリから蝦夷が島へと内外で展開してきた歴史が、近代日本の先駆となる北海道として今日のようなかたちに創られたと思います。光とともに陰多き歴史でもあります。北海道開拓記念館は開道100年を記念して創られて、30年の月日を閱したわけですが、先史、先人に敬意を払い、風土に愛情を注ぎ、今の暮らしに至る月

日を知るとともに、これからの有りように瞬時でない目を注いで子孫のためにも役立っていきたいものと思います。

全く新米の館長ですので、この島の文化・文明の歴史と未来についての広く深い理解を固められるように、館内外の皆様の考え抜かれた様々な知見を学ばせて頂きたいと思っています。開拓記念館としての成り立ちを尊重しつつも、この日本列島弧の北のノード(節)である北海道が、列島弧の他の弧とどうつながり、大陸・海洋とどう向き合って生きて来たのか、島だけに過剰にとらわれない視点で、古里の島の自然と人を見続けていけたらよいと思っています。

ヒトが自然の中にとけ込んで、ヒトも動物の一種にすぎないという当然のことが当然であったのは、遙か歴史の彼方のことになってしまいました。人類ははびこりすぎました。子孫のための地球を食いつぶさず、今日を生きるということが大変に難しいところまで人類は過剰増殖し、繁栄をむさぼり続けています。サステナブル(持続可能)な社会を作るにはどうしたらよいかが今人類に課せられた課題です。北海道が日本のサステナブルな21世紀活動の起爆剤となるために、次の時代の歴史を作り始めるために、歴史を未来志向的にこの記念館で学び進めたいものです。



北広島市立西の里小学校のみなさんといっしょに

第63回特別展

鯨 くじら 7月20日(金)~10月8日(月)

特別展「鯨」では、北海道に生きる鯨類(げいらい;クジラ・イルカの仲間)と、過去から現在までの北海道における鯨類と人との多様な関わりについて紹介します。

水島 未記(学芸部・学芸第一課学芸員/生物分野)

情報技術の発達は世界を狭くし、今や世界中のどんな生き物でも、テレビやインターネットを通じて見ることができます。特に鯨類は、機材の進歩と熱心なカメラマン達の努力により、以前は考えられなかったような迫力ある映像が撮られており、それらの映像とともに、メディアには「鯨」に関する情報が溢れています。誰もが気軽に鯨を「見る」ことができる時代なのです。

しかし、そういった鯨情報の氾濫に触れても、必ずしもそれを「身近に」感じられるわけではなく、多くの人は鯨の泳ぐ海を、どこか「遠い世界」のことと思っているのではないのでしょうか。



1858(安政5)年の寄り鯨の図
函館市中央図書館蔵

実は、北海道は、鯨とは非常に関わりの深い地域なのです。今この瞬間も、北海道のまわりの海には多くの鯨たちが泳いでいます。そのことをまず、知っていただきたいと思います。

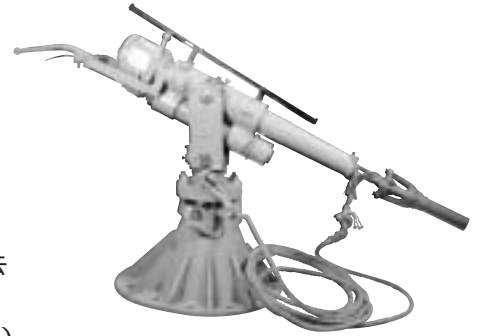
展示は5つの章から成ります。

1章「鯨を知る」では、生き物としての鯨類を、多くの骨格標本や美しい生態写真で紹介します。北海道にはこんなにたくさんの種類の鯨類がいるんだということを

認識していただけることでしょう。展示の目玉は、体長約8mのミンククジラの全身骨格です。5つの章のうちの1つですが、なにしろ大きい鯨のこと、展示場の面積にして半分くらいを占めています。

ひとくちに「鯨と人との関わり」といっても、時代や地域ごとに多様なものがあります。2・3章では、食料などとしての利用という直接的な関係を軸に、おおむね時代順に具体的な展示資料で紹介します。2章「流れ着いた鯨」で扱うのは、北海道では浜に流れ着いた鯨(寄り鯨;左写真)の利用が主体だった時代。一方、この時代でも、はるか太平洋を越えて来た欧米の捕鯨船が北海道の周辺でも盛んに鯨を獲っていたことが当時の人々によって文書や絵で残されています。日本が鎖国していたころですから、人びとの強い関心を引いたにちがいないと思います。そういった史料を今回のように多数集めて展示するのは、道内で初めての機会です。

3章「鯨を獲る」は、近代的な装備で鯨を獲るようになった時代です。大正期から1960年代を中心としたころ、北海道にはいくつも捕鯨基地があり、多くの人々がこの一大産業と関わっていました。巨大な鯨の解剖(解体)作業は名物ともなり、地元の子供たちが見物に集まることもあったそうです。展示では、そのころの写真や、捕鯨の様子を示す道具の数々をお見せします。圧巻は巨大な「捕鯨砲(右上写真)。オホーツク海で



捕鯨砲 網走市立郷土博物館蔵

ミンククジラなどを獲っていた実物を展示します。

4章「鯨に祈る」では、信仰や芸能など、鯨をめぐる民俗を紹介します。鯨の骨をまつた「鯨骨製記念物」がその例です。余市町内の神社に置かれていたシャチの骨や室蘭八幡宮の神楽に使われる「鯨神」など貴重な資料をお借りして展示します。そして5章「鯨と私たち」では、現代の鯨と人の直接的な関わりをいくつか紹介します。近年各地で盛んになっているホエールウォッチングはその代表といえます。

なお、捕鯨については、現在では、やめるべきだという意見と逆に推進すべきだとの主張が対立していることは多くの方がご存じだと思います。とはいえ、鯨と人との関わりを考える時、捕鯨は避けては通れない事柄ですし、特に北海道の場合は、鯨と人との関係の歴史の中で大きな比重を占めることになります。この展示会では、捕鯨に関して反対や推進など特定の考えを主張することはせず、様々な「関わり方」のひとつとして扱っています。

この特別展で、北海道の鯨たちについてもっと知り、身近に感じようになっていただければと思います。そして、人と野生動物の多様な関係について考える機会になれば幸いです。

ぜひ、見に来て下さい。鯨好きな人、特にオススメです!

「満洲開拓団」の自分史・資料をお持ちの方は、ご一報をお願いします！

日中共同の「満洲開拓団」調査について

寺林 伸明（学芸第三課長／歴史・近現代）

「満洲開拓団」調査と 自分史募集のお願い

北海道開拓記念館の現在の常設展示は、平成4年(1992)にリニューアルしたものです。時代の移り変わりをしめす資料も、それまでの約1.5倍、4,300件に増えました。戦争中の北海道をものがたる「戦争と北海道」のコーナーも、この時にできました。

日中戦争の拡大にともなって、昭和13年(1938)には、北海道から15～19歳の“満蒙開拓青少年義勇軍”222名が「満洲(中国東北部)へと旅立っていきました。かれらは、現在の黒竜江省最南部にある鏡泊湖沿岸に移住し、のちに義勇隊開拓団になりました。



茨城県内原訓練所に向かう北海道の第一次満蒙開拓青少年義勇軍
1938年(昭和13)5月3日札幌神社

このコーナーには、満洲の荒野で歩哨にたつ少年の写真が展示されています。公開後まもなく、この写真に「友達が写っている」と、元義勇隊開拓団員の方がたずねてきました。そして、自分たちの義勇隊開拓団について調べてほしいとの申し出を受けました。

その後、文部省の科学研究費の助成を受け、ご提供された関係者の名簿にもとづいて、アンケート



鏡泊湖義勇隊訓練所の開拓団結団式
1941年(昭和16)10月1日

調査・聞き取り調査をおこない、新たに得た資料・情報をもとに、戦後50年の企画展「昭和の15年戦争 - 親子で考える戦争と平和 - 」(1995年)を開催しました。この企画展では、鏡泊湖義勇隊開拓団のほかに、ハルビン市近郊に移住した八紘開拓団もとりあげ、北海道から家族づれで渡航した方々のありし日の姿を展示しました。

現在、この二つの開拓団を中心に、北海道あるいは樺太から満洲に渡ったり、満洲からの引揚後に北海道に移り住んだ元開拓団員、ご家族の方々の自分史を集めています。満洲開拓のご体験を書きとめた日記や冊子、当時の写真・地図などの資料がございましたら、当館の寺林、三浦学芸員までご一報をいただきたいと思います。(電話011-898-0456、郵便〒004-0006



阿城・八紘在満国民学校の子供たち
1940～45年(昭和15～20)

札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館 寺林・三浦学
芸員あて。



阿城・八紘開拓団のブラウ馬耕風景
1939～45年(昭和14～20)

中国研究者の講演会、 シンポジウムのお知らせ

本年8月初旬に、やはり日本学術振興会の助成をうけ、中国の黒竜江省・吉林省両社会科学院の研究者5名を招へいし、山形県と北海道の「満洲開拓」に関する文献を共同調査します。なお8月5日(日)には、当館におきまして、吉林省社会科学院研究員の孫継武先生の講演会「中国東北地域における日本移民の歴史調査について」を開催します。また8月7日(火)には、北海道大学におきまして、シンポジウム「日中両国における中国東北地域史研究の現状と課題」を開催し、黒竜江省社会科学院研究員の辛培林先生にお話いただきます。日中戦争下に、中国東北地域に移住した日本人「開拓団」と現地農民との関係がどのようなものだったか、戦争の時代を考え、その研究状況を知るまたとない機会になると思います。ふるってご参加くださいますようお願い申しております。

分野別研究

「北海道におけるチャシの形成・終焉と
その背景に関する基礎研究」

鈴木 琢也(学芸第一課学芸員 / 考古学)

右代 啓視(学芸第一課長 / 考古学)

村上 孝一(学芸第二課学芸員 / 建築史)

本州の中世末期から近世にかけての時期は、戦国時代とも呼ばれる武田信玄や織田信長などに代表される戦国大名が群雄割拠する戦乱の時代でした。当時の文献史料には、「館」や「城」などの記載が数多くみられ、戦に備えた防御施設が本州各地に築かれていたことがうかがわれます。

北海道周辺地域では、「要害遺跡」とは何か？その探求（開拓記念館だより Vol.35・4）で紹介したように、防御的機能を備えた「要害遺跡」が3～18世紀ころにみられ、特に中世～近世（アイヌ文化期）では、この「要害遺跡」の一つであり、壕や土塁など防御的機能をもつ「チャシ」が500力所以上も築かれているのです。このことは、北海道にも「緊迫した時期」があったことを示しているのではないのでしょうか。

この研究では、「チャシ」をとりあげ、アイヌ文化期の社会状況の一端にせまりたいと考えています。

この「チャシ」は、アイヌ民族の伝承にもみられ、シャクシャイ

ン（17世紀）との関係で知られる静内町シベチャリチャシや、釧路市モシリヤチャシなどは史跡公園として整備され、多くの人びとに親しまれています。かつて、河野常吉（1906）の「チャシ即ちアイヌの砦」に代表されるように明治時代以来、研究者の間で注目されてきた遺跡でもあります。

しかしながら、発掘調査が行われた「チャシ」は十数例だけであり、地形測量調査が行われたものもわずかなのが現状です。さらに、近年の開発や自然風化などにより、失われつつあるものもあり、詳細な地形測量調査による記録が重要な作業となっています。

これまで、開拓記念館では枝幸町ウバトマナイチャシ、サハリンのペロカーメンナヤ遺跡（初子浜チャシ）を発掘調査し、稚内市増幌チャシ、同増幌川口2号チャシなどを地形測量調査してきました。

この調査をふまえ、平成18～21年の4年間、分野別研究「北海道におけるチャシの形成・終焉とその背景に関する基礎研究」を実施



■ 晩生内2号チャシの壕・土塁

することとしました。

この研究では、考古学的方法に建築学などの視点を加え、拠点的な「チャシ」の詳細な地形測量調査を行い、その構造、立地環境、周辺遺跡との関係などを明らかにし、チャシの形成・終焉の背景にせまりたいと考えています。

平成18年度は、石狩低地帯の石狩川水系流域に分布する拠点的な「チャシ」、浦臼町晩生内2号チャシの地形測量調査を実施しました。

その構造は、丘陵の先端に二条の壕をもち、急傾斜で深い壕の両側に土塁を組み合わせています。入口と考えられるステップ状の遺構もみられます。さらに、このチャシは石狩川の右岸に立地し河川交通と強い関連を持っていると考えられ、チャシ周辺のウラシナイ（現在の浦臼町中津周辺）は、安政3年（1856）に松浦武四郎が石狩川沿いを遡上した際に止泊した拠点的な場所であったことも注目されます。

今年度は晩生内2号チャシに隣接する同1号チャシの調査を予定しています。これらの調査成果は、浦臼町で開催する公開講座で公表し、あわせて地形測量調査を公開します。

皆様のご参加をお待ちしています。

公開講座

「北海道におけるチャシの
形成・終焉とその背景」

日時：平成19年9月2日(日)

場所：浦臼町行政センター3階

あかねホール

（浦臼町ウラウスナイ183-1）

講師：鈴木琢也・右代啓視

（当館学芸員）



■ 晩生内2号チャシ地形測量図

学芸員の研究ノートから

『大豆から落花生へ - 再考 - 』にむけて

池田 貴夫（学芸第二課学芸員／生活史）

2006年11月から2007年2月まで、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館で研修する機会に恵まれました。そして、私が開拓記念館で携わっている生活史に関する資料の収集、研究、展示、普及事業などの最先端の動向を総合的に学んできました。

千葉県といえば、落花生の主産地として有名。まして佐倉市やその隣の八街市は、最も落花生生産の盛んな地域です。研修の傍ら、どうしても気になったのが、この地域で節分の日に何を撒くのかということでした。

私は、2001年に「大豆から落花生へ - 節分豆の変化をめぐる一考察 - 」という論文で、日本で節分に落花生を撒くのはどの地域なのか、それはいつ頃からなのか、なぜ大豆から落花生に変わったのかを、まとめました（当館紀要第29号）。そのなかで、北海道、東北、新潟などで、大豆から落花生への節分豆の変化が顕著なことを明らかにする一方で、その変化の本質をより深く理解するためにも、反対に大豆を撒き続ける地域に注目する必要があるのではないかという着眼点を提唱しました。だから、落花生の主産地なのに、家庭レベルで大豆をまき続けているといわれる千葉県が気になっていたのです。

2007年2月3日、節分の日の佐倉市内でのエピソードをひとつ。

私は、佐倉城址近くの麻賀多神社の節分祭を取材しようとしていました。節分祭は午後5時から。それまでの時間、麻賀多神社近くのとある千葉県産落花生専門店のぞくことにしました。その店の棚には、「千葉半立」や「中手豊」など千葉県産の落花生がずらりと並んでいます。節分の日ということもあり、豆撒き用の「福豆（北海道産大豆）」を売るコーナーも設けられていました。

ふと見ると、「福豆」コーナーで70グラム100円の大豆の袋を手にとって眺めている女性がいました。その後、女性は大豆を籠に戻したかと思うと、今度は場所を変え、220グラム525円の千葉県産「中手豊」の袋をしげしげと眺めていました。私は、もしや、家で落花生を撒くつもりで買おうとしているのではないかと想像しました。

この機会を逃すまいと、店員の方に節分のために落花生を買う人がいるか尋ねたところ、そのような人はほとんどいないとの返答。その瞬間、落花生の袋をもった女性は、ぎょっとした感じで振り向き、私と目が合ったのです。「もしかして、それ...」と声をかけると、女性は「は、はい、実はそうなん

です...」

女性によれば、これまで節分で落花生を撒いたことはなかったのですが、今年は奮発して落花生を撒いてみようと思ったとのこと。保育園に勤めていて、子供たちの前では落花生を撒いていることから、家でもやってみようと考えたようです。

清潔感などの理由で、全国の保育園や幼稚園では比較的早くから節分で落花生が撒かれていましたが、私の前掲論文では、依然、関東、中部、関西、四国、中国地方は一般家庭における落花生撒きの不振な地域、と位置づけました。

しかし、各家庭の事情を個々に訪ねてみると、節分豆をめぐるさまざまな動きが見られるようです。千葉県八街市では、現在に至り、自ら生産した落花生を撒く農家があることも確認しています。

このようなミクロな事例を全国レベルで追いつつ、大豆から落花生への変化の本質をより深く考えてみたいと思っています。



落花生専門店で節分のために落花生を買う女性
2007年2月3日 千葉県佐倉市にて

歴史と文化をサポートする微笑の天使

その名は解説員！



私たち解説員は
展示をわかりやすく説明し
体験学習(たいがく)を
やさしくサポートする
みなさまの強い味方です！

「北海道はかせ」第1号誕生

開拓記念館で昨年度からはじまった「チャレンジラリー」は、シートをもったお客さまが講座・講演会などの館行事に参加したり、展示場や体験学習室に遊びにくるたびに、かわいいスタンプがたまっていくという企画です。集めたスタンプの数によって、解説員が知恵を絞って考えた素敵な館オリジナル「記念品」をプレゼント！ さらにスタンプが40個たまると、なんと「北海道はかせ」

に認定されるのです。

去る4月22日(日)、その栄えある「北海道はかせ」第1号がついに誕生しました！ 認定されたの



認定証を受け取る深畑さん(写真右)

は厚別区在住の深畑勝広さん。いろいろな行事に積極的に参加して下さる常連さんです。

認定証の授与はその日開催されたフォーラム「北方文化論」の会場で行われました。フォーラム参加者約90名の暖かい拍手の中、右代教育普及課長から認定証を受け取った時の深畑さんのちょっぴり照れくさそうな笑顔が印象的でした。

「チャレンジラリー」は子どもから大人まで楽しく参加できる企画です。みなさんもぜひ挑戦してみてください。(解説員 越田雅子)

たいがく DE タンペ ヘマンタ アン?

「これなあに？」と気になって、手に取ってみたい衝動に駆られたことはありませんか？ そんなあなたは是非、体験学習室へ！！

今年度最初の体験学習室行事は「アイヌ民族の道具これなあに？ タンペ ヘマンタ アン？」でした。現在の私たちの暮らしの中であまり目にする機会のないアイヌ民族の伝統



なかにあるのは何だろう？

的な道具、その道具を前にしてはじめて思うことは「これなあに？」ではないでしょうか？ それをアイヌ語で「タンペ ヘマンタ アン？(これなあに)」と問いかけながら知の箱を開けて道具に触れ、その構造、使い方、意味を知りながら、根底に流れるアイヌ文化を感じてもらおうという企画でした。

札幌市立厚別西小学校6年生のみなさんも積極的に体験してくれました。仕掛け弓を動かして仕組みに感心する子、アイヌ文様作りを楽しむ子、友だち同士でアイヌ語を口にする子、それぞれ「？」が「！」にな

る喜びをその表情に現してくれていたようです。「これなあに？」と声に出して聞いてみたり、知の箱を開けたり、行動を起こして得た「！」は印象を強くして残ってくれることでしょう。

今回の企画はすでに終了しましたが、実は体験学習



体験学習室でレクチャーを受ける
厚別西小学校6年生のみなさん

室そのものが知の箱なのです。「？」が「！」になる企画をいつでも準備して待っています。「これなあに？」と気軽に私たち解説員に声をかけてください
ね。(解説員 辻幸恵)

毛糸募集

体験学習室には、いつでも体験することのできる、わら細工、伝統遊具、機織りがあります。機織りは毛糸を使って布(コースター)を作るというもので、後日、希望する方への作品の発送も行っています。ご家庭で使っていない毛糸がありましたら、体験学習室へおゆずりいただけないでしょうか。どんな毛糸でも大歓迎です。

(解説員 青木朱美)

学芸員の本

昨年から今年にかけて出版された学芸員が書いた本をまとめて紹介します。



●『アイヌ文化と北海道の中世社会』
氏家 等（前事業部長、現開拓の村事業課長）編
（2006年3月、北海道出版企画センター、3,990円）
著者 右代啓視 鈴木琢也 添田雄二 山田悟郎（以上、学芸第一課）
池田貴夫 小林孝二 舟山直治 村上孝一（以上、学芸第二課） 吉本忍（国立民族学博物館） 内田祐一（帯広百年記念館）
考古学、地史、民俗学、建築史、物質文化研究など様々なアプローチで、アイヌ文化研究に一石を投じる論文集。

●『ものとテクノロジー 北海道の物質文化研究』
氏家 等著
（2006年7月、北海道出版企画センター、4,515円）
背負運搬具や除雪具、臼や杵の分布など北海道で使われてきた“もの”を、周辺地域と比較して徹底的に調



べてきた集大成。

●『移住とフォークロア 北海道の生活文化研究』
氏家 等著
（2007年3月、北海道出版企画センター、4,515円）
積雪寒冷地の暮らしの中で培われた衣、食、住や民間信仰、民間芸能など、これまで軽視されてきた北海道の民俗研究の総まとめ。



●『探そう！ほっかいどうの虫』
堀 繁久（学芸第一課）著
（2006年8月、北海道新聞社、1,500円）
北海道にいる昆虫の紹介をはじめ、昆虫採集のポイントやコツ、採集する道具や写真の取り方まで詳しく紹介。

人事異動

3月31日付
事業部長 氏家 等（定年退職）
4月1日付
総務部主任 桑野祥子（地方労働委員会事務局へ）
総務部主任 櫻澤 麗（北海道札幌中央道税事務所から）
4月30日付
館長 河村耕作（退任）
5月1日付
館長 丹保憲仁（前放送大学学長）

6月1日付
副館長 村井公裕（環境生活部環境局長へ） 副館長 星川和徳（北海道札幌南道税事務所長から） 事業部長 笹木義友（学芸部主任学芸員から） 学芸部主任学芸員 小林幸雄（総務部主任学芸員から） 総務部主任学芸員兼学芸第三課長 寺林伸明（事業部主任学芸員から） 総務部総務課主査 中川 博（石狩支庁総務課主査へ） 総務部総務課副主幹兼主査 森田 豊（環境科学研究センター企画調整課長から） 事業部主任学芸員 小林孝二（事業部教育振興課長兼務を解く） 事業部教育振興課長 水島未紀（事業部教育普及課学芸員から）

開拓記念館メールマガジン

“みゅーじあむ”発行周期:月1回

配信登録をご希望の方は

<http://www.hmh.pref.hokkaido.jp> 北海道開拓記念館のホームページから
お申し込み下さい。

悠久の北海道の歴史にダブルクリック！

開拓記念館で開催される展覧会や講演会、体験学習室での行事はもとより、New!北海道の歴史や文化についてのミニ情報を、みなさまのパソコンへ、いち早くお届けしています。お申し込みは簡単！



この正方形のQRコードを、カメラ付き携帯電話で撮影して読み込むと、開拓記念館のホームページ（携帯電話用）に



つながります！
展示や行事の案内、バスの時刻表などにリンクしています。

利用者数

平成19年1月4日～19年3月31日

人数	記念館を訪問されたお客さま				館外での行事や赤れんがを訪問されたお客さま		計	年度累計
	常設展示室	特別展示室	体験学習室	講座・講演会等	公開講座等	「北海道の歴史ギャラリー」入場者		
	2,962	3,578	641	374	0	86,855	94,410	531,828



北海道
開拓記念館

ホームページ <http://www.hmh.pref.hokkaido.jp>

平成19年6月30日 Vol.37 No.1(通巻195号)
編集・発行 北海道開拓記念館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
TEL(011) 898-0456 FAX(011) 898-2657